

## 6 大学図書館に期待するもの

著者	津崎 良典
内容記述	研修：平成29年度大学図書館職員長期研修 主催：筑波大学 期間：平成29年7月3日～7月14日 会場：筑波大学春日エリア情報メディアユニオン2 階情報メディアホール等
発行年	2017-07
その他のタイトル	人文学徒にとっての大学図書館
URL	<a href="http://hdl.handle.net/2241/00148329">http://hdl.handle.net/2241/00148329</a>

2017 度大学図書館職員長期研修  
日時：7 月 4 日@筑波大学春日エリア  
担当講師：人文社会系准教授・津崎良典  
(tsuzaki.yoshinori.gn@u.tsukuba.ac.jp)  
担当科目：大学図書館に期待するもの

## 人文学徒にとっての大学図書館

### I. 私の専門領域(1)：人文学、humanities

- ① 「人文」：中国では古来、この世界は天・地・人から構成されており、それぞれに「文」があると考えられていた<sup>1</sup>。つまり、天文・地文・人文である。そして、ここでの「文」は模様や飾りを意味する<sup>2</sup>。したがって人文とは、「人」が生み出した模様つまり文化のことであり、とりわけ文字がその表現手段として特権的と考えられていた。
- ② 「*studia humanitatis*」：イタリア・ルネサンス期に興隆した、古代ギリシア・ローマの文物の原典研究を通じて幅広い教養を獲得することで「人間性 (*humanitatis*)」の回復を目指した「研究 (*studia*)」

### II. 私の専門領域(2)：近世ヨーロッパ哲学

- ① G・W・ライプニッツ<sup>3</sup> (1646 年-1716 年) が「王子の教育に関する書簡」(1685 年?) のなかで夢想する「自然と人工の劇場 (*théâtre de la nature et de l'art*)」<sup>4</sup>と『普遍アトラス (*Atlas Universalis*)』の実現のために → 人工物か自然物か、オリジナルか複製か、文

<sup>1</sup> 典型的なところとして北魏王朝の『劉子』(劉勰)「慎言」では、「文」を共通分母とする三者の連繫が説かれている。「日月者天之文也。山川者地之文也。言語者人之文也(日月は天の文なり。山川は地の文なり。言語は人の文なり)」。これについては、中国哲学が専門の井川義次教授(本学人文社会系)に教えていただいた。次注についても同様。

<sup>2</sup> 中国最古の字書、漢代の許慎『説文解字』によれば、「文」は「錯畫也、象交文(錯はれる画なり。交文に象る)」、つまり象形文字としては、交わった線や画をかたどったものであり、のちに秩序をもった美しい「紋」を意味するようになった。さらに善き装飾、美德の意味も帯びていった。『説文解字』については、阿辻哲次の『漢字学——『説文解字』の世界』(東海大学出版会、1985 年)が基本文献。

<sup>3</sup> ドイツ・ライプツィヒ出身の哲学者。田中泰三「ライプニッツの図書館活動」(酒井潔ほか編『ライプニッツ読本』所収、法政大学出版局、2012 年)によれば、「『図書館普遍主義の思想』の先駆けをなしたフランスの図書館学者ガブリエル・ノーデ(一六〇〇年-五三)が図書館人ライプニッツに大きな影響を与えた」(135 頁)。

<sup>4</sup> この表現は、ライプニッツの専売特許ではなく、マインツ大学などで医師として活躍していたヨハン・ヨアヒム・ベッヒャー(Johann Joachim Becher, 1635-1682)が 1668 年に出版した言語習得のための教科書『教授法(*Methodus didactica*)』に既出である。ライプニッツはこれを出版の翌年に読んだらしい。その要約と講評を書き残しているからである。ライプニッツによれば「自然と人工の劇場」とは、ルネサンスからバロックにかけて王侯貴族がこぞって建造した珍品収集館・美術蒐集室やそこに展示される品々、動物の骨格標本などが展示される解剖学劇場といった実験室、薬草園や動物園、さらには、天文台、武器庫、鉱山で使用されるような大型機械の貯蔵庫などから構成される集合体のことである。したがって「劇場」という表現を芝居の上演される小屋と解してはならない。それはむしろ事物なり概念なりを人々に感覚的に学習させるための空間である。

字資料か映像資料かそれ以外か、紙媒体かそれ以外か、網羅性追求型か否か、陳列室かそれ以外か、等々

【参考資料 1】

人工（art）と自然（nature）に関する陳列室を利用できたら宜しいと思います。それは若き王子に事物そのものの標本か少なくとも模型をお見せするためです。この陳列室とは、いわば自然と人工の劇場（Theatre de la Nature et de l'Art）でありましょう。解剖学上の模型は「すでに」作られていて、人間の身体や幾つかの部位、例えば眼球などの機構をかなり正確に模しております。私は、木製で可動式の部品からなる要塞の模型一式を見たことがあります。また、ままごと遊びのための小型の銀器もたくさん見たことがあります（津崎良典ほか訳、『ライブニッツ著作集』第二期第二巻、工作舎、2016年、98頁）。

【参考資料 2】

私は、もし存在するなら諸技法に関する図鑑を強く推奨します。すなわちつねづね構想してきたように、範型の大きい銅板に「いろいろ」指示して彫らせるのです。それは、『アトラス』のうちに収められ、或る一つの学問や技法や職業を全望できるようにしたものです。じっさいに私はそのような図版を目にしたことがありますし、私自身もいくつか持っております。例えば一枚の図版にあらゆる種類の要塞が描かれたものです。さらに艦船やガレー船を描いたものもっており、そこには航海術関連の用語を使った説明文も付されています（同上書、96頁）。

【参考資料 3】

近未来の先端技術には、“におい”をデジタルアーカイブすることも可能かもしれない。忘れられない匂い、忘れられない香気もあるだろう。「中略」デジタルアーカイブは“知”だけでなく、五感を呼び覚ます機能も担うのだろう（影山幸一「忘れ得ぬ日本列島——国立デジタルアーカイブセンター創設にむけて」、岡本真ほか編『デジタル・アーカイブとは何か——理論と実践』所収、勉誠出版、2015年、24頁）。

- ② 「博物館／美術館」、「図書館」、「文書館」という区別（MLA）の解体、あるいは「博情館」の実現のために

【参考資料 4】

博物館は、情報機関であります。それぞれの分野に応じて、ひろく情報を収集し、蓄積し、変換し、創造し、伝達する。そういう機関であります。そして、蓄積された膨大な情報のなかから、最新の、正確な知識を市民に提供する、これが博物館の仕事であります。その知識は、人間の過去、あるいは現在に関するものであるかもしれません（梅棹忠夫『メディアとしての博物館』、平凡社、1987年、17頁）。

#### 【参考資料5】

博物館は意味の収蔵庫であるといった。意味とは、情報である。博物館に収蔵されている品物は、物質として収蔵されているのではない。情報として収蔵されているのである。博物館は、情報の収蔵庫である。博物館がその展示を公開し、市民の観覧に供するというのは、その収蔵された情報を市民に伝達するということである。博物館は、ひとつの情報伝達装置である。／博物館に収蔵されているものは、物質ではなく情報である。だからこそ圧縮が可能なのである。ひとつの世界、ひとつの文明の全容をさえ、ひとつの博物館におさめこむことができる。その世界、その文明の全体をそのまま収蔵し保存することなど、できるわけがない。それは、情報としてのみ可能なのである。／博物館が孫悟空のヒョウタンでありうるのは、相手が情報だからである。あるいは、存在を情報化するからである。博物館の観覧者たちは、博物館において情報の伝達を受ける。そして、その伝達された情報にもとづいて、ひとつの世界の全体像を再現し、再構築するのである（同上書、41-42 頁）。

#### 【参考資料6】

職業集団としての歴史家のあいだには、また、文字史料を特権化し、<sup>なま</sup>生の史料——というのは多くの場合手書きの古文書を意味しているのだが——と向かい合いその繙読に没入している者でなければ歴史家ではないという気持ちが、これまた根強くある。古文書館で姿を見かけなくなったらおしまいだとよく言われるのも、歴史研究がもっぱら文書館、つまりは文書史料と結びつくかたちでしか考えられてこなかった重い遺産のように思われる。同じく歴史の研究者でありながら、思想家の著作や文学作品、絵画や建造物などの芸術作品に立脚することが多い思想史・文学史・美術史などの研究者、また、文字化されていない口頭伝承や、民具のような「もの」を基本的な素材とする民俗史家などが、本来の歴史家とは別種の存在とみなされがちなのもそのためである（二宮宏之「歴史の作法」、『二宮宏之著作集』第一巻所収、岩波書店、2011 年、112-113 頁）。

### III. texte、textile、texture から contexte、intertextualité、dé-contextualisation へ

#### ① 人文学徒（研究者と学生）の日常風景

- 研究者にとっての「論文」、そしてその集大成としての「研究書」／学生にとっての「レポート」、そしてその集大成としての「卒業論文・修士論文・博士論文」
- 「資料」（研究対象であり学習対象）と「問い」が論文／レポート執筆の両輪である。
- 資料を探し、手に入れ、読み、問いを立て、そして、論文ないしレポートを書く。
- とりわけ論文は、独創性と論証性の二点を成立要件とする。独創性は、1/「先行研究」つまり「二次資料」の収集と解説の精度、2/「一次資料」の解説の精度による。

- ⇒ コレクション：できるだけ多くの先行研究を探し、手に入れる。
- ⇒ クリティック：批判的に読む。
- ⇒ ストーリー：先行研究の相違点をみつけ、それらを<sup>グループビン</sup>一括りにしたり、対照させたりして、一つの物語のように配列する。
- ⇒ フォーカス：焦点を絞る。
- ⇒ コネクション：最後に一つのリサーチクエスト(問い)に関連づける。問いが立てられれば、論文の成功は訳されたといっても過言ではない。
- ⇒ アナライズ：リサーチクエストに先導されて、一次資料を分析する。

- ・ 資料が先か、<sup>リサーチクエスト</sup>問いが先か → 資料とは何か。

- ② 「資料」とは何か。資料を構成する三つのc：content（中身、内容）<sup>5</sup>、carrier（素材、モノ）<sup>6</sup>、そして context（文脈、環境）

### 【参考資料7】

「テキスト」の語源であるラテン語には「織り物」の意味があったが、構造主義以降の用法では「言葉によって語られたもの」全般を指し、さらに解釈学的社会学の潮流では、狭義の「言語」によらずとも「語られたもの」あるいは「生きられたもの」を指して使われるようになった。例えばテキストは、文字で記録された文献や文書（ドキュメント）のみでなく、通信販売のカタログやインターネット上に公開された「日記」、そして「映画」や「音楽」や「放送番組」なども指し示す。こうした広義の「言語」によって織り成された、自己充足的な輪郭を持つ社会的現象（あるいは作品）をテキストと呼ぶ場合、そのテキストの輪郭は常にすでに決定されているわけではないことに注意する必要がある（北川高嗣ほか編『情報学事典』、弘文堂、2002年、619頁）。

- ③ 「一次資料」と「二次資料」の二項対立を再考する。

- ・ J・クリステヴァ『テキストとしての小説』（谷口勇訳、国文社、1985年）等が提唱する「間テキスト性」、またはG・ジュネット『パランプセスト——第二次の文学』（和泉涼一訳、水声社、1995年）が提唱する「パランプセスト」とは何か。
- ・ パランプセストあるいは再利用された羊皮紙：「下層<sup>イボ</sup>テキスト」（先行するテク

<sup>5</sup> 図書館学や情報学で「データ」（音声データ、動画データ、静止画データ、テキストデータ）と称されているものに相当する。なお、本講義では「テキスト」と換言する。

<sup>6</sup> 「フォーマット」と換言してもよい。ディスカバリ・サービス「Summon」を使用した筑波大学附属図書館の検索サービス「Tulips Search」では、「フォーマット」として「CD、Filmstrip、Newspaper Article、アーカイブ資料、ウェブ資料、コンピュータファイル、スライド、データセット、テクニカルレポート、ニュースレター、パンフレット、プレゼンテーション、マイクロフィルム、マイクロフォーム、レポート、映像資料、画像、会議録、学位論文、楽譜、業界誌、研究論文、雑誌、雑誌/電子ジャーナル、雑誌記事、雑誌論文、参照、市場調査、詩、写真、手稿、手稿譜、出版物、書評、章、新聞、新聞記事、図書/電子書籍、図面・スケッチ、政府文書、地図、電子リソース、特許、美術品、標準、複写物、朗読、録音資料（音楽）」が挙げられている。

スト) + 「<sup>イベル</sup>上層テキスト」(後続のテキスト)<sup>7</sup>

- オリジナルか複製かという問いは成立するか(作者を「無名存在、不在、空白」と規定するクリステヴァ、「作者の死」を宣告する R・バルト、「オリジナリティー」を否定し、「引用のシステム」からの再生産を説く N・フライ) → いわゆる「コピペ」問題や「著作権」という概念は、問題や概念としてそもそも成立するのか。
- 一次資料の網羅的な収集／メリハリの効いた二次資料の収集(「叢書」「シリーズ」「コレクション」)ということはどういう意味をもつか。

#### 【参考資料 8】

相互テキスト性[とは]文学理論のコンテキストのなかで生まれた概念。文学作品を一つの閉域と見なす従来の文学研究を批判するものとして提起された。この概念を最初に用いたのはジュリア・クリステヴァである。彼女の簡潔な定義によれば、間テキスト性とは、「いかなるテキストもさまざまな引用のモザイクとして形成されており、すべてのテキストは他のテキストの吸収であり、変形にほかならない」というものである(『言葉、対話、小説』)。テキストは完足した一つの統一体ではなく、一義的な意味のまわりに組織されているのでもない。顕在的にであれ潜在的にであれ、テキストは他のテキストとの関係のうちにあり、その関係の網目においてはじめて可能になっているのである(木田元編『哲学キーワード事典』、新書館、2004年、339頁)。

- ④ 「文化資源」と「プレ文化資源」<sup>8</sup>の二項対立を再考する → プレ文化資源は、どのような手段で、そしてどのような条件のもとで文化資源となるのか。種々のテキストはどのようにしてプレ文化資源となり、また、文化資源と認められるようになるのか。或る文化資源がどのような条件のもとで、そして、誰にとって支配的な地位を占め、その結果それ以外のものが少数派となったり、あるいは副次的なものとなったりするのか(資料の出所、評価、選別に関する問題)。

#### 【参考資料 9】

どうやら日本の司書教育は、すべてこのやりかた、つまり、まず「図書資料」と「非図書資料」とにわけて、登録するのは「図書資料」だけというやりかたでおこなわれているようです。これでは、学術情報をとりあつかう研究機関の図書室の司書としては、まったく不十分です。司書教育に学術資料をとりあつかう専門コースをつくらなければ解決しないのかもしれませんが(梅棹忠夫『情報管理論』、岩波書店、1990年、167頁)。

<sup>7</sup> 例えば、ウェルギリウスの『アエネーイス』とジョイスの『ユリシーズ』は、いずれもホメロスの『オデュッセイア』に由来する上層テキストであり、『オデュッセイア』は『アエネーイス』と『ユリシーズ』の共通の下層テキストである。上層テキストには、文学作品の翻訳や翻案、脚色、改作、要約などが含まれ、さらには映画や演劇などもこの概念によって分析される。例えば、『カサブランカ』とそのパロディであるウディ・アレンの『ボギー！俺も男だ』、『ハムレット』とその脇役を主人公にした『ローゼンクランツとギルデンスターンは死んだ』など。

<sup>8</sup> まだ「文化資源」として認識されていないもの。この術語は、古賀崇「デジタル・アーカイブの可能性と課題」(岡本真ほか編『デジタル・アーカイブとは何か——理論と実践』所収、勉誠出版、2015年、51頁)に学んだ。

⑤ 資料の「分類」と「配架」とは何か。

- DDCでもNDCでもなく
- ライプニッツによる図書分類法（1:神学; 2:法学; 3:医学; 4:知識哲学; 5:数学; 6:物理学; 7:言語学および文学; 8:民衆史; 9:文献史および書誌; 10:叢書および雑録）
- フランスのグランゼコールの最高峰・エコール・ノルマル・シュペリウールの附属文系図書館（在パリ）の図書分類法＝主題別（B: *Bibliographie (et Beaux-Arts)*; H: *Histoire*; L: *Littérature*; S: *Science*; T: *Théologie*）と判型別の組み合わせ

⑥ 「検索」とは何か。

- 「資料」に関する「メタデータ」に何を含めるのか。
- ジュネット『スイユ——テキストから書物へ』（和泉涼一訳、水声社、2001年）が提唱する「パラテキスト」とは何か（テキストに付着し、その一部として認定可能な範囲までの「衣装」；「根本的に他律的で補助的な言説」）。
- パラテキストには何が含まれるか（作者名、タイトル、献辞、エピグラフ、序文、章題、註釈と参考文献、あとがき、奥付（発行所、出版社、値段など）；自家解説、書評、書簡、インタビューなど）→ 何を検索対象とするべきか真剣に再考することを迫られる！国会図書館のデータベースに目次データが入ったことだけで満足すべき？さらには、*carrier* と *context* についてはどのように処理する？
- パラテキストの空間的分類：「ペリテキスト（書物の内部）」（物質的な書物つまり「書物」という同一空間のなかで、テキストの周囲に付き纏うもの）/「エピテキスト（書物の外部）」（最初の書物には含まれず、その限りで書物の外部に位置するもの）
- パラテキストの時間的分類：「先行的パラテキスト」（例えば近刊予告情報）/「遅延的パラテキスト」（例えば、刊行後のインタビューや書評、研究論文）→ 検索に *diachronic*（これまでどうということが論じられ、自分は何を考えたか）と *synchronic*（自分はいま何を考えているのか、他人は何を考えているのか）の観点を導入することを迫られる！
- 変わらないもの = 保存データ、時々変化するもの = 表示機能・検索機能、積極的に変えていくもの = デザイン<sup>9</sup>
- ディスカバリ・サービス（より精確には、図書館での購読・非購読の区別なく、世界中に存在するあらゆる *content* を検索対象とするウェブスケール・ディスカバリ）との連携；諸外国の MLA が保有するメタデータ、諸外国のデジタル・アーカイブ（*Europeana* など）との連携

<sup>9</sup> 前掲の古賀論文（57頁）を参照のこと。

- ⑦ 結局のところ、人文学徒の研究手法の枢要は、「資料」の文脈化<sup>10</sup>と脱-文脈化である！  
あるいは、研究活動の方向性を匿名的かつ先行的に規定する「前理解」を反省することである！

【参考資料 10】

Hence it is evident that each interpretation is guided by a certain interest, by a certain putting of the question: What is my interest in interpreting the documents? Which question directs me to approach the text? It is evident that the questioning arises from a particular interest in the matter referred to, and therefore that a particular understanding of the matter is presupposed. I like to call this a pre-understanding (R. Bultmann, *History and Eschatology*, Edinburgh: Edinburgh University Press, 1957, p. 113).

【参考資料 11】

さまざまなタイプの痕跡を手がかりとしながら歴史家は過去を再構成しようとするわけだが、ここであらためて注意しておかなくてはならないのは、ある意味では無限に存在していると言ってよい人間活動の痕跡のなかである状況のなかである種の痕跡が注目される場所となるのは、それらが単にこの世に存在しているからではないということである。考古史料にせよ民俗史料にせよ図像史料にせよ、それらの史料に刻まれている痕跡は、歴史家の問いがあって初めて歴史家の世界に呼び戻されるのである。歴史家の問いがなければ痕跡はその姿を現さない。さらに言えば、歴史家が問いかけなければ痕跡は答えてくれないのだ。同じ史料を眼の前においてもそこからなにを読み取れるかは、歴史家の技量や習熟もさることながら、史料に対し、いかなる問いを発しているかにかかわっているのである（二宮、同上書、129 頁）。

#### IV. interdisciplinarité から intersection へ

① 「司書」とは誰か

- ・ クリエーターというよりは、プロデューサーand/or エディターとして、さらには研究者とのコラボレーターとして
- ・ 資料の集約（aggregation）、支援（facilitation）、分配（distribution）から、利用者の巻き込み（engagement）へ

<sup>10</sup> 大学図書館を使用した学生の学習・研究支援の代表的かつ古典的なものに「課題図書（リザーブブック）制度」があるが、これは「課題」という或る文脈にさまざまな「資料」を関連づける「文脈化」の一環であるといえる。



- ② 「学際性」<sup>11</sup>から「領域交差」へ<sup>12</sup> → なぜ大学のなかに図書館があるのか、なぜ図書館は大学のなかで最も特権的な場であるのか／ありうるのか／なければならないのか。

【参考資料 1 2】

知のこの横断的な領域交差は、「学際性〔interdisciplinarité〕」と通称されているものに還元されるわけではない。学際性とは、それ自体すでにその境界線が特定されている共通の主題をさまざまな手段と補助的な方法をもって研究するために、既成の諸科学の代理人のあいだで計画された協力体制のことである。その限界そのもののうちにとどまることがどれほど必要だとしても、以上のように理解されたかぎりでの学際性は、これまでに前例のない問題構制を制定するのでも、新たな対象を考案するのでもない。それ自体としては、研究領域ならびに各領域に固有な手順と方法の構造とその認定された境界線を変更しようとはしないのだ。反対に、私たちは領域交差を仕掛け、これを展開していくことが求められていると思うのだが、この領域交差は、既成のものであるかぎりでの学問分野によって全般的に抑制されたり周縁化されたりしている——それは多くの場合、<sup>ディシプリン</sup>学問分野の影響力、正統性、有効性のためだが——もろもろの問題構制を、<sup>ランガージュ</sup>言語活動によるもろもろの出来事を解放しようとするものでなければならぬだろう（デリダ『哲学への権利 2』、津崎良典ほか訳、みすず書房、2015 年、304 頁）。

- ③ 「保存」と「展示（活用）」の二項対立を改めて考え直す → これとこれが繋がると面白い！という感覚の重要性

## V. 私の事例紹介(1)：筑波大学附属図書館二宮文庫と特別展「歴史家 二宮宏之の書棚」（附属図書館職員との協働）

### ① 二宮文庫

【参考資料 1 3】

本学の附属図書館の文庫は、今日、約 80 点を数えます。そのなかでも最新かつ最大の

<sup>11</sup> Cf.「学際性（interdisciplinarité）は、共通の課題や問題の解決に向けた複数のディシプリンの共同を指す。／ディシプリン（discipline）はラテン語の discere（学ぶ）から派生した語で、「学問分野、専門分野、学科」を意味し、いわば知識の部分や分枝を指す。学習には一定の規範が必要であるため、discipline には「規律、訓練」「生活規範、規則」の意味もあり、さらには「規範を逸脱した際の懲罰」の含意もある。ディシプリンは知識の秩序を整理する枠組みであり、一定の対象や主題、一連の方法論や組織的な探求様式、合理的な認識や論証、妥当な価値関与などによって各ディシプリンは区別される。一定の概念や方法、価値、規範に立脚した伝統的なディシプリンに対して、一九六〇年代後半から、複数のディシプリンの共同、すなわち、「学際性（interdisciplinarité）」が重視されるようになる。たとえば、環境問題のような複雑な課題については、自然現象の解明だけで済まされず、人間の経済活動や社会構造の解明、文明観の再考、人間と自然の共生に向けた倫理観の創出などが必要となり、自然・社会・人文科学の連携が要請される。／本書〔デリダ『哲学への権利 2』〕では、研究教育において当時ますます重要性を増していた学際性を考慮しながら、デリダが interscience（学際的研究）や intersection（領域交差）といった表現を用いて、哲学とそれ以外の学問分野の共同を別の仕方でも考案しようとしている点に留意されたい」（デリダ『哲学への権利 2』、津崎良典ほか訳、みすず書房、2015 年、444 頁）。

<sup>12</sup> 「領域交差」と「学際性」の相違については、西山雄二氏の論考「哲学への権利と制度への愛」（西山雄二編『人文科学と制度』所収、未来社、2013 年）のうち 298 頁から 301 頁にかけても参照のこと。

ものが、歴史家・二宮宏之氏（1932～2006 年）の旧洋蔵書からなる二宮文庫です。／二宮氏は、長らく東京外国語大学で教鞭をとられ、フランス絶対王政期の国制史や思想史のほか、フランス革命史や社会史の分野で多大な業績をあげられました。本文庫は、二宮氏が研究と教育の現場でじっさいに使用された洋書（雑誌を含む）約 9000 冊から成り立っています。／1850 年以前に刊行された貴重書ならびに雑誌を除く全資料は、大塚図書館に開架されており、貸出対象となっています。すでに内外の読書人から貸出の要望が数多く寄せられています。貴重書のほうは、中央図書館貴重書庫に所蔵されており、その電子化については、今後検討される予定です。／本文庫の配架については、二宮家の書斎における排列をほぼそのまま踏襲しており、二宮史学の全容を俯瞰することができます。ただ、このような配架を実現するには、請求番号に工夫を凝らす必要がありました。そこで附属図書館では、分類ラベルの一段目には NDC を、二段目の著者記号には二宮氏の著者記号を一律に記載することにしました。さらに三段目には、二宮氏が独自に編み出した 13 個の分類を反映させることにしました。こうすることで、寄贈者による資料の排列法をできるだけ尊重しながら、NDC の体系に組み込むことが可能になりました（津崎良典ほか『年報』、筑波大学附属図書館、2017 年、11 頁）。

## ② 2016 年度筑波大学附属図書館特別展

### 【参考資料 1 4】

戦後日本の西洋史学を牽引した二宮宏之（1932-2006）の歿後一〇周年という節目に開催される本特別展は、筑波大学附属図書館に寄贈された約九〇〇〇冊に及ぶその旧蔵洋書群「二宮文庫」から貴重書を中心に、フランス絶対王政期を専門とした歴史家の肖像と仕事を紹介する。／第一部「歴史家の肖像<sup>ポルトレ</sup>」では、歴史家の誕生と成長に迫るべく、生前の二宮が深く豊かな学問的交流をもった日本とフランスの歴史家の書物などを展示する。勉学のために字引とともに熟読した書物、友情の印として献呈され大切にされた書物、日本の読者のために翻訳した書物……これらを通じて若き人文学徒が真の歴史家に変貌していく軌跡を辿る。／第二部「歴史家の仕事<sup>メチエ</sup>」では、二宮の代表的な論攷や著作が生み出されていく過程で役立てられた書物より、一六世紀から一八世紀にかけてフランス、イギリス、そしてオランダで刊行された王令・法令集などを展示する。歴史家は、どの史料をいかに解釈することで《歴史<sup>ヒストリー</sup>》という《物語<sup>ストーリー</sup>》を紡ぎだすのだろうか。その現場を二宮が実際に繙いた書物とともに歩く（津崎良典ほか『図録』、筑波大学附属図書館、2016 年、6 頁）。

## VI. 私の事例紹介(2)：筑波大学哲学カフェ「ソクラテス・サンバ・カフェ」

- ① 背景と内容：1992 年にフランスで始まった一般市民と哲学者の対話（哲学カフェ）は欧米では既に市民権を得ている。その中でも、本学哲学・思想専攻主催の哲学カフェは、

一歩抜きん出たものと評価され、各種メディアに取り上げられ、各地の高校・企業・団体から招聘され、実施回数も増加している。取組み内容は、（１）市民たちの対話の場の創設（多くの人が、人生・働くこと・教育・死・病・人間関係・時事問題について悩んでいる。しかし、その悩みや自分の考えを、広く他人と共有したり、ディスカッションを通して深めたりする場所はほとんどない。哲学者がファシリテーションをするという安心な場所で、視野を広げ、共に考えを深めることを可能にする哲学カフェは、市民の生涯教育の場を提供している）、

（２）高校教育の改善／高大連携の促進（革新的な授業改善、学校と地域の対話促進、生徒指導改善、職員会議の実効化）、（３）一般企業の生産性向上のためのワークショップ開催（会社の理念・方針の明確化、会議の実効化、組織革新のための職員教育、社会的慈善活動・環境保全・メセナ活動等コンサルティング）である。

- ② 実績：市民たちの対話の場の創設：通算 100 回以上実施、参加者累積 1000 名超。2012・2016・2017 年度筑波大学社会貢献プロジェクト、2013 年度筑波大学人文社会系プロジェクト、2014・2015・2016 年度筑波大学人文社会科学研究科公開講座採択。2013 年度より、附属図書館共催で図書館のチャットルームにて開催。2014 年度より筑波大学教育クラウド室との連携により、筑波大学オープンコースウェアにコンテンツ配信。また、茨城県庁を始め各種団体から招聘。神奈川県公立高校新任教員研修ほか、2014・2016 年度筑波大学教員免許状更新習を実施、各種学校での研修（模擬授業、教員研修）は年間約 20 回を数える。一般企業の生産性向上のためのワークショップ開催として、TOYOTA を始め様々な団体から招聘あり。

- ③ 関連ホームページ：<http://tetsugaku-cafe.com/>

- ④ 関連事例：せんだいメディアテーク（公益財団法人仙台市市民文化事業団）主催「鷺田清一とともに考える」（「せんだいメディアテーク館長の鷺田清一が、各分野のプロフェッショナルからお話をうかがいながら、いま、メディアテークを通してみえる社会の課題について、みなさんと共有し、考えを深めていく対話の時間」）；てつがくカフェ@せんだい

cf. <https://www.smt.jp/projects/washidadirector/>

cf. <http://table.smt.jp/?p=4097>